

1970年代のエクソンモービル社による油田支配体制の再構築 —アラスカ、北海での原油生産体制の形成—

プロジェクト代表者：伊藤 孝（経済学部・教授）

〔1〕本研究の目的、課題

1. 1970年代初頭ないし前半以降、中東などにおいて国際石油企業群の原油と油田に対する支配権は、現地の産油国政府による資源と施設の国有化、「事業参加」（原油生産事業に対する経営権の取得）などによって、短期間のうちに失われた。以後、中東などでの原油生産、原油価格の決定などは産油国政府（国営石油企業）の手に委ねられたのである。産油国による自国資源に対する主権の確立は、世界の石油産業史に新たな段階を画するものであった。

他方、中東などで油田支配権の喪失に直面した国際石油企業各社は、おなじ1970年代に新たな原油生産拠点の構築に邁進する。その最も重要な活動は、アメリカのアラスカ地域、ヨーロッパの北海においてなされた。1960年代後半、あるいは70年代初頭に発見され、巨大な埋蔵量を内包しながら、自然環境に由来する巨額投資の必要性により、いまだ開発が手つかずの状況におかれたこれら新興の2大生産拠点は、この時代に国際石油企業の有力生産拠点に編入されるのである。今日における国際石油企業の原油生産体制の原型は、この時代に形成起点のひとつを求めることが出来るであろう。

2. 本プロジェクト研究は、世界の石油産業界において今日なお最大企業として存在するエクソンモービル社（1972年までの名称はニュージャージー・スタンダード石油会社。これ以降、1999年にモービル社を買収してエクソンモービル社となるまではエクソン社。以下では、エクソン社と記載）を対象として、これら新規の2大生産拠点での油田（および天然ガス田）の開発、生産体制の形成を考察する。同社は、これらのいずれにおいても有力生産企業の一社として存在したのであった。

3. 主たる課題は以下の2点である。

第1に、採算面に不安が多かったこれらの油田の開発を可能にした要因を解明することである。従来、1970年代前半の国際的な原油価格の高騰（「第1次石油危機」）に、その根拠を求める見解が多かった。だが、これに劣らず重要なことは、これら2つの地域・海域における、エクソン社と他社との共同による効率的な生産方法、事業体制の構築にあったように思われる。アラスカ、北海における生産方法の特徴、およびこれがその後の世界の原油生産事業の進展に果たした役割、これらを明らかにする。

第2に、この時代におけるエクソン社と他の有力競争企業、特にロイヤル・ダッチ・シェル社（以下、RDシェル社と記載）、BP社との油田の開発・生産の共同事業、およびこれに内包された確執と対抗が、その後の各社の世界石油産業界での支配力の強弱をどのように決定づけたかである。今日なお最大企業としての存在を誇示するエクソン社にとって、これら2つの新規油田における活動は如何なる意義を有したのであろうか。

〔2〕研究の成果

(1) 第1の課題について

エクソン社は、アラスカでは1977年に、北海では1975年に初めて原油を獲得する。その際、両地域・海域のいずれにおいても、大規模パイプラインの他社との共同利用などによって、厳しい自然環境に由来する投資リスクを軽減し、費用の削減を図ったことが重要である。

アラスカでは、第1に、エクソン社、アーコ社、BP社の3社を主要な株主とする巨大な原油輸送パイプライン（トランス・アラスカ・パイプライン・システム、当初の輸送能力は1日当たりの平均で50万バレル〔50万バレル/日と記載。以下同じ。79年に150万バレル/日）を敷設したこと、第2に、抗井（生産井）の掘削などにおいて、油田（プルーダー・ベイ油田）の共同開発を遂行したこと、である。ここでは、後者について記すと、1生産井あたりの原油産出規模は、1979年2月頃であるが、2000バレル/日から2万3000バレル/日の範囲にあった。この当時のアメリカ国内の平均（15バレル/日。但し1970年代半ば）と比べ、これら坑井の産出規模の大きさは際立つと言えよう。これは、ひとつは、油田そのものが大規模であったことによるが、いま一つとして、権益保有企業各社が、抗井の本数を可能な限り抑制することで合意し（640エーカーに1ないし2本に限定）、掘削費用の削減と生産の最大限の効率化を図ったこと、これが落とせない要因である。

次に、北海においては、1971年にRDシェルと共同で発見したブレント油田（スコットランドの北東沖合に位置するシェトランド諸島のさらに北東100マイルに所在）の原油と、その後に周辺で発見された油田で産出される原油とを大規模パイプライン（ブレント・システムと呼ばれる。輸送能力は当初30万バレル/日、1980年に100万バレル/日）で共同輸送する体制を構築したことである。これもまた、上記アラスカのパイプラインと同様に、輸送費用の大幅削減を実現したのである。北海におけるこうしたパイプラインの共同利用は、ブレント・システムを嚆矢として、以後エクソン社、RDシェル社のみならず、他の主要企業もまたこれを導入するのである。

なお、エクソン社によるアラスカでの活動については、1977年の生産開始時点においても、同社が原油の販路をなお不十分にしか持ちえず、その後の増産に大きな困難を抱えたことが留意されなくてはならない。この難問は1977、78年頃からの国際的な原油価格の上昇（特に78年末頃からの「イラン革命」によって惹起された高騰。「第2次石油危機」）により打開されることとなった。アメリカ市場において、高価格の中東原油の輸入は抑制され、これに代替する形でアラスカ原油の活用が図られたのである。エクソン社はこれ以降、アラスカでの生産の顕著な拡大を果たした。エクソン社が抱えた販路問題とその打開は、従来全く明らかにされたことがなく、本研究の重要な成果のひとつである。

（2）第2の課題について

第1に、エクソン社にとって、アラスカ原油は、1983年には同社の全アメリカ生産量の43.0%に達する（33万6000バレル/日）。アラスカ油田は、同社にとってアメリカ国内での最重要の原油生産拠点に転じた。だが、最大企業はBP社であり、同社はエクソン社の2.5倍近い生産を実現したのである。なお、RDシェルの場合、アラスカでは全く原油の生産はなく、これら3社の中では最も見劣りする。

第2に、エクソン社の北海での獲得原油は、RDシェルとほぼ同じと考えてよいが、1980年にイギリス領北海において13万9000バレル/日、ノルウェー領北海では6万500バレル/日と推定される。最大企業は、ここでもBP社であり、その大半はイギリス領からと考えられるが、同年に51万3000バレル/日以上を産出したと推定される。但し、エクソンは、遅れていたブレントでの生産が82年以降急速に増加したことで（84年にブレントのみで42万7000バレル/日）、BP社との懸隔をほぼ埋めつつあった。

見られるように、1980年代前半頃までは、これら新開の油田地帯でのエクソン社の達成は、少なくともアラスカについてみる限りは、BP社に対する劣位が明白であった。この時点においてもエクソン社は、世界全体で見ても最大の原油生産企業として存在した。だが、かかる地位を維持する上で、これら地域・海域での活動が果たした役割はなお限定的であったと考えられる。